

空港で働く人々

林 晃史

一九九一年の夏、南アフリカ共和国に出張した。九月十一日にナミビアのウインドフークを朝発ち、十一時半にヨハネスブルグに到着した。同夜八時二十分のロンドン行き英国航空便を待つ間の約九時間、ジャン・スマッツ空港に足留めされたのを利用して、その際、予て依頼されていた南アの仕事着について観察することにした。

普段着で働く人

空港に着いてまずしたことは、ナミビアから抱えてきた資料を空港にある郵便局で発送することであった。国内便と国際便のターミナルの中間に小さな郵便局がある。窓口で働いているのは主にインド人で、ここでは制服ではなく皆普段着で働いている。ただ、南アフリカは九月といえば冬なので少し涼しく、セーターを着ている局員もいる。

重い資料を発送して身軽になったので、昼食をとるため食堂に行く。この食堂はセルフサービス



ヨハネスブルグ近郊公園，午後のひととき

ス制で、コールド・ディッシュは無入だが、ホット・ディッシュのコーナーには料理人がいて、注文するものを取り分けてくれる。料理人は白い上衣を着け、コック帽をかぶっている。ナミビアでは米の飯が食べられなかったので、久し振りにチキンカレーを注文する。飲物を加えてレジに廻ると、ここはアフリカ人の女性。通勤着の上に会社支給のエプロンをつけてつり銭をくれた。

米の飯に満腹したので、次に新聞を買いにキオスクに行く。店員は白人の女性。ここも制服はなくカーディガンを着込んで坐っている。数種類の新聞と雑誌を買って、落着ける場所を捜しに行く。国際便ターミナルの静かな一角に席を占めて、買い込んだ新聞と雑誌を読み、一週間振りに南アフリカの動きを知る。一通り目を通してしまっても、まだ時間は十分あるので、再び仕事着の観察にとりかかることにする。

## 制服の領域

今度は南ア航空の職員が対象だ。目の前を何人もの白人のパイロットやスチュワーデスが往き来する。彼らはさすがに会社が定めた制服を着ている。

制服は空色である。南アフリカ人は一般に空色が好きなので、そう言えば官庁や銀行の守衛さんたちも同色の制服を着ていた。英国航空のスチュワーデスが、赤青黒の縦じまの、それと一目で分かる制服を着ているのに比べ、南ア航空のスチュワーデスが唯一個性を発揮できるのはネットワークであるらしい。普通ならまず顔から観察するのだが、今回は仕事着のチェックだからなるべく顔は無視することにする。それにしても空色のツーピースに身をつつみ、さっそうと脚線美をみせて通り過ぎるスチュワーデスを観察するのは楽しい。

パイロットとスチュワーデスのチェックはこのくらいにして、今度は清掃のおばさんたちの観察に取りかかる。彼女らはすべてアフリカ人である。まず一樣にふとっていることとモップをもっていることとですぐ見分けがつく。おばさんたちは南ア航空から支給された紺のワンピースを着ている。なかにはその上にカーディガンをはおっている人もいるが、これは自前らしく色もまちまち（ただし原色が多い）である。さらに皆、頭にスカーフをかぶっている。時には仲間と話し込んで仕事の手をやすめている者もいる。また、トランクを満載した手押し車を押すアフリカ人ポーターも通りかかる。彼らは会社支給の紺のつなぎを着ている。

観察も一段落したので、お茶を飲みに一階にある喫茶店に降りる。紅茶を注文すると白い上衣のアフリカ人ウェイトレスが給仕してくれる。飲食関係者は白の支給着を着ることを会社か

ら義務づけられているらしい。お茶を飲みながら、一週間前にまわったヨハネスブルグ市内や黒人居住区（タウンシップ）でのアフリカ人たちの服装について回想した。

### 街頭とソウエトで

南ア共和国は他のブラック・アフリカ諸国に比べ工業化がすすみ、衣料品はほぼ一〇〇%国産化されている。デパートも何軒か入ったが、どこでも衣料品は氾濫している。ただ年率一六%に達するインフレと一三%の売上税（九一年九月三十日から一〇%の付加価値税に変更）の導入で、物価はそう安いわけではない。まして対南ア経済制裁の影響で失業率は四〇%を超えと言われ、失業者にとつてはまず食糧確保が第一で衣料は二の次にならざるをえない。それにもかかわらず、街を歩いているアフリカ人の衣服は他のブラック・アフリカ諸国に比べると数段と良く、ポロを着ている人に



ケープタウン・ハイストリーの露天商

はめつたに出会わない。

ヨハネスブルグ近郊にある南ア最大のタウンシップであるソウエトも短時間再訪したが、前回見た時と違い居留区の一画に高級住宅街ができ、アフリカ人の中にも有産階級が始めたことを物語っている。昼間だったので大人たちはほとんどヨハネスブルグ市内の白人の工場やオフィスに働きに出掛け、人影はまばらで、目立つのは女性や子供たちである。女性はシャツとスカート姿で、東アフリカの女性のようにカンガを着ている者はほとんどいないが、スカーフをかぶっている者は多い。子供たちは学校の制服と思われる青色の校服がよく目についた。

そろそろ夕刻になり観察にも倦きたので、チェック・インするため再び二階に戻る。この空港は現在の南アフリカの政情を反映してしばしばテロ事件があるのでセキュリティ・チェックは極めて厳重である。寒そうな半袖の制服を着た若い白人係官が手荷物を調べ、武器は所持していないと念を押す。大砲を持っていると相手はニヤッと笑って通してくれた。

こうして一九九一年九月十一日のジャン・スマッツ空港での半日は終わった。定刻に飛び発つた英国航空機内では、例の特徴ある制服を着たスチュワーデスたちが、忙しそうに機内を廻り、われわれに夜食のサービスをしてくれた。

(はやし こうじノアジア経済研究所研究主幹)